

平成 29 年度(2017 年度) 第 1 回とよなか都市創造研究所運営委員会  
議事要旨

日 時 : 平成 29 年(2017 年) 7 月 17 日(月) 10 時 00 分 ~ 12 時 00 分  
場 所 : 生活情報センターくらしかん 3 階 会議室  
出席委員 : 赤尾委員、肥塚委員、宗野委員、森委員、山本委員  
事務局 : 足立、糸井、上野、大平、熊本、比嘉、仲谷  
傍 聴 : 1 人

開会

部長挨拶、事務局員紹介

案件(1) 委員長及び副委員長の選出について

- ・赤尾委員が委員長に選出された。
- ・肥塚委員が副委員長に選出された。

案件(2) 平成 28 年度(2016 年度) 事業報告について

資料: 資料 3「平成 28 年度(2016 年度) 事業報告について」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、質疑応答をまとめる。

- ・委 員 : インターンシップを募集する方法とインターンシップの調査の内容はどうだったのか。
- ・事務局 : 総務部人事課を窓口として、大学から募集し、本人の希望を踏まえ各課で調整し受け入れている。  
内容は、昨年度は「豊中市における空き家増加傾向の背景と課題、解決策」をテーマとして調査研究している。

案件(3) 平成 29 年度(2017 年度) 調査研究について(報告)

資料: 資料 4「平成 29 年度(2017 年度) 調査研究(報告)」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、質疑応答をまとめる。

「豊中市民の生活の質に関する調査研究」

- ・委員：この調査研究における仮説は何か。
- ・事務局：経済状況、家族関係、健康状態が幸福度にどのような関係があるのかについて検証していきたい。
- ・委員：それは研究の目的であって、各要因がどのように関連しているかという仮説が必要ではないか。ある程度の予測をたてて、それを検証するのではないのか。
- ・委員：幸福に関するいくつかの言葉が出てくるが、それぞれが同じものを指すのか、定義が必要である。また、これらの言葉と主観的厚生との関係をきちんと整理してほしい。それが今回の研究における基準になる。
- ・委員：アンケートの具体的な内容はどのようなものか。誰に何を聞こうとしているのか。
- ・事務局：具体的な質問項目は、年収、主観的な健康状態、幸福感、家族関係、働き甲斐、保育や高齢者への行政サービスなどについて、豊中市民 18 歳以上 8000 人を対象として実施する予定である。
- ・委員：行政サービスと幸福度の関係について、仮説としては保育園に預けることができたから幸福感が高いという想定なのか。
- ・事務局：保育園に預けられないと働くことができない場合が多いので、幸福度が下がると予測している。認可外の保育所ならば保育料が高いなども幸福度に関係していると考えている。
- ・委員：アンケートはワーディングも重要で、それは質問紙を見ないとわからない。
- ・委員：行政サービスに言及していることの目的について、サービスの効果や、質の向上が主観的厚生に関わることを見たいのか、サービスが届いていないところへの底上げを目指しているのか、わかりにくい。質問紙の設計をしっかりとしないと、何を調査するのかわからなくなる。
- ・委員：研究結果は、どうやって庁内にフィードバックするのか。他市や市民にどうやって伝えるのか。
- ・事務局：庁内に対しては、質問紙の設計の段階で関連部局の意見を聴いた上で進めている。報告書の作成後には、市民及び職員を対象とした調査研究報告会を開催し、普及啓発に努めている。また、他市に対しては、報告書を送付するほか、自治体シンクタンク研究交流会議等で報告していく。
- ・委員：総合計画のレビューをするときにこの研究成果を基礎的な素材にするなど、市政にどのように関わっていくか、具体的な目標も必要ではないのか。
- ・委員：主観的厚生の研究の中での位置付けが不明である。  
先行研究の質問も引用しているようだが、質問の内容と構成を引用元とは変えているのはなぜか。行政サービスを幸福感と直接結び付けることには違和感があるが、

先行研究はあるのか。

他市の幸福感についての調査は多く、豊中市の研究の意義、ポリシーは何かを明確にする必要があるのではないのか。また、幸福感ランキングなどが既に公開されているので、結果をまとめるときは、それも考慮にいれるとよいのではないのか。幸せリーグなどに参加して発表することもできる。

- ・ 委 員：研究所の過去の研究データとの相関もみると面白いかもしれない。
- ・ 事務局：質問紙は現在関連部局との調整中である。後日、委員には、メールで送付するので、その内容を確認していただきたい。

「南部地域の活性化に向けた調査研究」

- ・ 委 員：半構造化インタビューの内容は。
- ・ 事務局：居住者を対象とした質問では、南部に住むまでの来歴と、昔からの居住者には地域の変化を聞く。また、普段の生活における地域との接点、今後の居住意向について、などについても聞く予定にしている。
- ・ 委 員：生活の質研究との関係はあるのか。  
南部に関しては、様々な要因で地域にネガティブイメージがあることが過去の調査研究で明らかになっている。生活の質研究で、豊中市民の幸福感が高いという結果になると、南部とのギャップをどう説明するのか。二つのテーマには重なり合うところがあり、別々にまとめることがいいのか。
- ・ 事務局：今のところ、生活の質研究と関連づけることは想定していない。南部地域の研究は、現状を詳細に把握し、そこからどういう仕掛けをもっていけば好転していくかを考えていきたい。昨年度は、アンケート調査を行って南部を他の地域と比較したが、どうしてもアンケートではネガティブな要因が浮き彫りになったので、今年度は、インタビューなどを実施することで、もっとポジティブな部分を探したい。
- ・ 委 員：南部地域からの転出先の分析をしてはどうか。
- ・ 事務局：研究所では、過去に移動要因調査を行っている。その結果も改めて確認していきたい。
- ・ 委 員：インタビュー対象者の数と、選考方法はどうするのか。
- ・ 事務局：10～30人くらいを予定している。フィールドワークを通じて知り合った団体・個人からの紹介。属性に偏りが出ないように、バランスをとるようにしている。
- ・ 委 員：地域に対するネガティブなイメージは学力の格差も大きいと思う。格差をなくすために豊中市は何かしているのか。

- ・事務局：南部地域に限らず、学力格差が見られる学校には、少人数学級を実施している。また、学力に関わらず、規模の小さな学校では、クラス替えができないなど人間関係が固定化するので、学年を2学級にするなど、教員配置増を実施している。
- ・委員：研究の目的に「活性化策の提案へと結びつけることとしたい」と記載されているが、「ポジティブな要因を明らかにする」と具体的に書いた方がわかりやすいのではないのか。また、南部地域の活性化については、総合計画のリーディングプロジェクトとして位置づけられていることもふれておく方がいい。

#### 案件（４）平成29年度（2017年度）機関誌について

資料：資料5「平成29年度機関誌「TOYONAKAビジョン22」Vol.21について」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、質疑応答をまとめる。

- ・委員：執筆者は決まっているか。
- ・事務局：半分ほど決まっている。あとは調整中である。
- ・委員：過去の機関誌のテーマは、まちづくり関係が多かったが、今回は個別テーマになっている。
- ・事務局：過去にあまり取り上げていないテーマだったことと、今回の監修をしていただく予定の赤尾委員長と編集担当者の専門が教育関係だったことからこのようなテーマとする予定である。
- ・委員：「子ども・若者の学びと育ちを支える」とあるが、テーマ候補としては、子どもに関するものが多く、若者のテーマが少ないのではないのか。  
また、子どもと若者の区分はどうなっているのか。
- ・事務局：若者について執筆したいという先生も含まれている。  
子どもは18歳以下、若者は30代までとしている。
- ・委員：こういうテーマは現状の課題中心になりがちだが、豊中市は環境教育も国際交流も盛んなので、そのような活動も取り上げてもらいたい。  
また、このテーマには興味がある市民も多いと思うので、市民に周知してもらいたい。

#### 案件（５）とよなか地域創生塾について

資料：資料6「とよなか地域創生塾の概要」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。質疑応答は特になし。

案件（６）その他

事務連絡

- ・次回第２回運営委員会は、10月中旬から11月初旬に開催予定。

閉会